

「一日目」――邂逅

主人公と澄羽が初めて出会う場面。

澄羽にとって、白布とそこにある命は、特別なものというより、ずっとそばにあった日常の一部。

相手を拒むでも、意味深に語るでもなく、当たり前のこととして静かに言葉を交わしている。

自分たちを怖がらず、目を逸らさない主人公に、澄羽はまだ名前のつかない興味を抱き始める。

沈んだ静けさはあるつつも、暗くしすぎず、感情を大きく乗せすぎない。

触っちゃだめだよ

まだ、生きてるから

みんな、怖いって言うの

わたしが抱えてるものを

……あなたは、そうじゃないみたい

また、明日

「一日目」―― 白い村

一日目よりも少しだけ主人公との距離が近づく日。

主人公が再び自分のもとへ来てくれたことを、澄羽は驚きながらも嬉しく感じています。

まだ自分のことを多く語ることはできませんが、「話したい」という気持ちが少しずつ表に出始めます。

自分の役目や宿命については、澄羽自身も言葉にしきれていません。その理由や、自分が何者なのかを完全に理解しているわけではなく、身体だけが当たり前のようにそれを知っている状態。

一日目の静かな距離感はそのままだに、ほんの少しだけ柔らかさや親しみが見え始めるイメージです。

昨日の……

見に来たの？

ううん。来てくれて……ありがとう

祈るため、かな……多分

分からない。でも、織らなきゃいけないの。みんな、それが“わたし”だって言うから

怖くない？

わたしの……抱えてるもの

ねえ……今日も来てくれたんだね

ううん、いまは……いいの

ほんとだね、話したいこといっぱいあるんだよ

でも、全部言ったら――終わっちゃう気がするよ

……うん

「三日目」―― 探す理由

主人公との会話を通して、澄羽がこれまで考えることのなかった、自分自身の願いに触れ始める日。

「もし織らなくていいのなら」と問いかけられ、役目の外にいる自分を思い描く。

「空を飛んでみたい」という言葉から、まだ名前もない願いが、すかに形を持ちはじめます。

夜は、主人公に呼ばれたつもりでいるものの、実際には澄羽のほうが、無意識に夢へ招いてしまっている。

してはいけないことだとつつすら気づきながらも、主人公に興味を持ち、頼ってしまったような心情。

昼には芽生えたばかりの願いを、夜には戸惑いとためらいをわずかに滲ませるイメージです。

……来てくれたんだ

うまく言えないんだけど

糸だった頃のことを、全部忘れちゃうみたい……
自分がどこから来たのか、分からなくなるのかも

……あなたは、どこから来たの？

うーん……

……ほんとはね。

空、飛んでみたいの

来たんだね

わたしは、あなたが呼んだのだと思ってた

ううん。違うのかな

こんなこと、だめなのにな

「四日目」―― 風は語る

初めて役目から離れ、澄羽が一人の少女として空を見上げる日。

三日目にこぼした「飛んでみたい」という願いは、「見ていてほしい」という願いへと少しずつ形を変えていく。

夜は、主人公の血の温かさに触れ、自分の知らなかった「生」の温度を知る。

自分の羽で空を飛びたいという憧れは、主人公へと向けられた、小さな祈りのようなものになり始めている。

静かな話し方はそのままに、澄羽の願いが少しでも前を向き始めるような温度感を意識していただけだと思います。

だめじゃ……ないけど

そうだね……

たまには羽を、伸ばさないとね――

こんなに空、広がったんだね

見ちゃいけない気がしてた。

見たら……行きたくなっちゃうから

……上。

飛んでみたいの。

風になるんじゃないかって――自分の羽で

どうして？

ずるいね、その言い方

来てくれたんだね

これ、少し持っけてくれる？

あっ……

こんな色、初めて見た

痛くない？

でも……血って、こんなに……あたたかいんだね

ねえ

わたしが……飛べるとしたら、見ててくれる？

ありがとう

「前日譚」——空の手前

澄羽視点で描かれる物語。

全体を通して、「」内のセリフ以外は一人語りや朗読に近いイメージです。

感情を大きく乗せるのではなく、静かな独白として語るような温度感を意識していただければと思います。

前半は、「白羽様」という役目を当たり前のものとして受け入れて生きる日常。

感情を強く表に出すことは少なく、白を織ることは呼吸をすることと同じような感覚です。

男の子とのやり取りでは、澄羽の優しさや、「自由に飛ぶ」ということへの憧れがわずかに垣間見える。

後半は、蚕と自分自身を重ねながら、空への憧れと役目の狭間で揺れる澄羽の内面を描いています。

機織り小屋

朝は、戸の隙間をすべる風の音ではじまる。

障子の紙をわずかに押し、畳の上を撫で、わたしの呼吸の在り処を探るように巡って、外へ抜けていく。

起き上がる前に、風だけが先に朝をほどいている。

胸の奥がひとつ鳴る。

遅れて息が追いつく。

敷布が擦れ、乾いた繊維が皮膚をかすめる。

指で端を引くと、ずれた線が爪の裏に引っかかった。

角を合わせ、布の重なりをなぞる。

呼吸に合わせて押さえると、線は静かに揃っていく。

整ったあとの沈黙だけが、わたしを落ち着かせる。

冷えた土間の湿りが足裏に絡む。

竈《かまど》の灰はまだぬるく、昨夜の熱を薄く抱えている。

柄杓《ひしゃく》は水に半分沈み、柄《え》の先だけが乾いた空気で白んでいた。

舌の先まで上がった“呼び名”は、音になる前に消えていく。

床板の冷えだけが、返事の代わりに残っていた。

村の通り

外へ出ると、夏の匂いが胸へ入り込む。

家並みの上には白が滲み、視界の底を塗り替えていく。

縁《ふち》に生まれた影だけが、淡く地面へ落ちている。

（村人）「おはようございます、白羽様」

“呼び名”だけが、風より先に届く。

振り向く前に、背中へ影が落ちる。

白が陽を跳ね返し、その光の縁が肩に触れる。

影は細く引き延ばされ、道の先まで続いていた。

その長さが、呼吸の深さを揃える――

それでも、白の集まるほうへと向かってしまう。

わたしの足もとから、そっとはみ出した影と一緒に。

土手

土手へ向かう道は、村の白からわずかに外れている。

布の気配が背中へ退き《しりぞき》、草と土の匂いが混じりだす。

張っていたものが、ひとすじだけ緩む。

足を止めると、空が近い。

視界を塞いでいたものが消えただけで、重さの行き場が変わった。

腰を下ろし、膝に白を広げる。

川面を渡ってきた空気でふくらみ、すぐに自分の重さを思い出したみたいに沈んでいく。

生きものが胸を張り、何事もなかったふりをして戻る仕草に似ていた。

針で布の目を探し、潜らせ、引く。

張りすぎれば繊維が小さく拒み、緩めば光が途切れる。

知っているのは瞳ではなく、皮膚の内側に沈む感覚。
風が渡り、布の端が持ち上がる。

糸だった頃の“記憶”が、ひと呼吸ぶんだけ蘇る。
そのとき、草の影が跳ねた。

――蝶だった。

陽を裂くように舞い、低く滑って逃げていく。

追う足音が弾み、男の子の腕が空《くう》を掴む。

最初から、空《そら》を奪われることを疑っていない羽ばたき。

見送っているうちに、針先が白から逸れていた。

糸は風に攫われ、布の外へ伸びようとする。

慌てて引き戻すと、繊維の奥で震えが残る。

2
(澄羽)「捕まえちゃだめー」

息を整えるより先に声が出る。

男の子が振り向く。

蝶とわたしを交互に見る瞳。

眉の端には不満の影。

3
(男の子)「どうしてー？」

4
(澄羽)「えっ……」

風が、ひと息ぶんだけ向きを変えた。

内側に溜めていたものまで、そちらへ引かれるように。

5 (澄羽)「……自由に、飛ばせてあげてほしいの」

言葉が出たあと、胸の奥で糸が細く引かれる。

理由を探すより先に、指先が針を握り直す。

皮膚の裏だけが、前から知っていたように静まる。

男の子は膝の上の白を覗き込み、口を尖らせた。

6 (男の子)「お姉ちゃん、またそれ」

細い指が布を指す。

7 (男の子)「いつも織ってるね。つまんないの？」

白の重みが、腕の骨まで沈む。

針を持ち直し、潜らせ、引く。

布は何事もなかった顔で、糸を迎えていた。

8 (澄羽)「……うつん」

張りは静かで、指先のほうが先に答えている。

9 (澄羽)「今は……こうしてないと、落ち着かないの」

声は言葉の途中で細くなる。

針だけが均衡《きんこう》を保つ。

触れればどけてしまいそう。

10

（男の子）「ふーん」

男の子は首を傾げる。

踵が小さく浮いて、影が揺れた。

11

（男の子）「じゃあさ。ぼくも手伝ってあげようか」

12

（澄羽）「ありがとう」

唇の端だけをほどいて、首をわずかに振る。

13

（澄羽）「でも……これはきつと。ひとりでやらなきゃ、
だめなの」

針先に目を落とす。

白の奥には、まだ朝の気配が眠っていた。

起こしてしまえば、糸の張りが変わる。

そんな気がして、息まで浅くなっていく。

14

（澄羽）「大切な……お役目だから」

その言葉は、布の上に置かれても沈まなかった。

重さは音になる前にほどけて、繊維の内側へ吸い込まれる。

本当の名は、もっと深いところで絡んだままだ。

男の子は首を傾げたまま、蝶のほうへ視線を投げた。

追いかける背中が軽く、風のほうへ傾いている。

分からないままでいられる形……

それが、少しまぶしい。

15

（澄羽）「ね」

針を置いて立ち上がる。

膝に残った布を風へ返すと、糸が短く息をした。

16

（澄羽）「別の虫。見せてあげる」

17

（男の子）「ほんと？」

草を踏み替える音が小さく鳴って、風がこちらへ傾いた。

土手の草は、踏み替えるたびに音を変える。

乾いたところは紙みたいに鳴って、湿ったところは足裏の奥へ小さく沈む。

男の子の足音は軽く、わたしの歩幅より半拍だけ先にある。

蝶を追うときと同じ速さ――けれど今は、わたしの影の端をなぞるように行ったり来たりしていた。

木陰は、土の匂いを溜めていた。

葉裏に残った夜の湿りがほどけきらず、枝の影が地面に薄い網目を作り出す。

そこに入ると、世界の白が静かになる。

根元に置いていた籠を引き寄せる。

籠の内側から立ちのぼるのは、葉の匂い。

刻まれた夏の青さが、折り畳まれて眠っている匂い。

息が触れると、内側にかかっていた張りがひとつほどける。

白の前ではうまくできない呼吸が、ここでは形を思い出す。

18 (澄羽)「ほら」

蓋をずらすと、籠の中の“白”が、ゆっくり息をした。

男の子が身を乗り出し、陽をそのまま写したみたいな丸い瞳が、籠の底まで落ちていく。

19 (男の子)「これも、ちょうちょ？」

20 (澄羽)「……似てるけど、ちがう虫」

言い終えたはずの音が口の内側に戻ってきて、舌の根に薄く貼りついた。言葉はいつも、布より先に乾いていく。

21 (澄羽)「この子は、飛べないの」

籠の縁を指でなぞる。

竹のざらつきが、皮膚の内側に小さな棘を残す。

棘は痛みじゃなくて、“ここにいる”ことを確かめるための印。

22 (男の子)「でも、はねがついてるよ？」

男の子は、籠の中の白い背に指を寄せた。

触れない距離で、指先だけが空《そら》を探るみたいに揺れる。

23 (澄羽)「……ここには、空がないから」

それは頭の上にあるのに、視線は自然に下へと落ちていく。

きつと――わたしの中にだけ、届かない場所があるからだ。

生まれる前に切り取られた“明日”と一緒に、地面の下で眠っている。

籠の底で、白いものがゆっくり体をくねらせた。

24

（男の子）「動いてる」

25

（澄羽）「うん。ちゃんと、生きてる」

指を近づける。

籠の底の白が、葉の影を押し返すみたいに背を丸めた。

糸の端を探すときみたいに、指先が勝手に熱を覚える。

皮膚の裏を流れる温度さえ、手放してしまいそうだった。

ふいに、光が揺れた。

追いかけていた影のつづき。

翅《はね》は陽を拾い、宙でひとつ跳ねる。

落ちた影が、籠の中の白へ重なった。

丸めた背に影が貼りつき、瞬きのあいだにほどけてしまう。

影は空へと羽ばたき、白は地面の底へと還っていく。

どちらも同じ線を描いているのに、行き先だけが違っている。

気づくより先に、腕が自分を抱いていた。

背中から内側へ、細いものが絡みつく。

抱えたものが、逃げないように――

（男の子）「お姉ちゃん、寒いの？」

（澄羽）「ううん、なんでもないの……」

声の端に細い繊維が絡み、引けば引くほど締まっていく。

ほどこつとすればするほど、余計に締まる結び目。

男の子の視線がひらりと揺れ、陽を裂く影を追う。

踵が地面を忘れ、足裏が一瞬、空《そら》を踏む。

草の穂が擦れ、緑の匂いが低くはじける。

それを見送るあいだ、顔がわずかに持ち上がる。

視線は、空の手前で静かに落ちた。

袖口を指でつまんで、布の厚みを確かめる。

指先に残るのは、乾ききらない熱だった。

熱は、触れたことへの証みたいに、ここにいないものまで引き寄せる。

草の匂いが退き、糸の乾きが寄ってくる。

目を探し、潜らせ、引く。

白が形を持つたび、黒い澱《おり》が沈む。

音もなく重さだけが増え、吐く息がわずかに浅くなる。

布は何も言わずに受け入れ、針先だけが迷いの分だけ鈍る。

ふいに、その鈍りをほどく手つきがよぎる。

急がないのに、躊躇わない。

白が奥へ消えても、帰り道だけは手放さない。

張りすぎれば拒まれ、緩めば途切れる――その境目だけを確かめるように呼吸している。

言葉より先に、皮膚が覚えていた動きだった。

それが母だった人の手だと気づくまでに、ほんの一拍遅れる。

28

（母の記憶）「白はね、汚れがない色じゃないのよ」

声は背中の内側から滲んだ。

黒い澱を撫で、その上へそつと白を重ねるみたいに。

29

（母の記憶）「汚れを全部、引き受けたあとに残る色なの」

言葉のあと、風の湿りを確かめるように息を動かす。

草の先で折れた空気が糸を撫で、布の端を持ち上げ、静かに降りる。

黒いものが消えるのではなく、上から白が重なる。

輪郭だけが静まり、重さは深いところへ沈む。

空を見なくなったのは、いつからだろう。

空を仰ぐと、わたしを留めている縁が、ひとすじほどける。

そのほころびを指先で押し戻すみたいに、白へ視線を縫い留める。

ずれたところを揃え直すのが、いつもわたしの“役目”だった。

揃えてしまえば白は同じ高さで並び、影は同じ場所へ落ちる。

そうしていれば、外へはみ出さずにいられるから。

空は軽くひらけているのに、わたしの肩は“ひらかない”。

見てみたい……と、触れない高さを目でなぞる。

布でも白でもない場所を。

手の届かない高さを。

わたしの羽で。

「五日目」――白のざわめき

「白羽様」として役目を求められる中で、澄羽の中にあつた迷いや恐れが、少しずつ表に出始める場面。

主人公が自分のために声を上げてくれたことで、役目ではなく、一人の少女として自分を見てくれる存在に救われています。

昼はまだ笑顔の奥に本音を隠していますが、夜には「まだ、ここにいたい」という願いが、初めて言葉になる。

静かな話し方はそのままに、普段は抑えている感情が、声の揺れや息遣いからわずかにこぼれるようなイメージ。

平気

……うん。少しだけ、逃げよっか

……ごめんね。止めてくれようとしたのに、わたし、何もできなくて

ありがとう。まだ、名前で呼べてもいないのに……

……わたし

まだ、ここにいたい

「六日目」――結び目の夜

終わりが近づいていることを、澄羽自身が誰よりも理解している場面。

これまで胸の内にあった迷いや願いを抱えたまま、自分の役目と向き合い始める。

「まだここにいたい」と願う気持ちは変わらない。
それでも、終わ리から目を背けるのではなく、その日を静かに受け入れようとしている。

「明日も、来て――」という言葉には、不安や寂しさだけでなく、最後の瞬間を主人公に見届けてほしいという想いが込められている。

大きく感情を揺らすのではなく、静かな覚悟と、ほんの少しの願いが言葉の温度から滲むようなイメージ。

今日の風は、やさしいふりが上手だね

手、見えて

明日、風が止むの

止まると、糸が静かになる。

静かになったら、つづきを織らなくていいの。

……うつん、織らなくてはいけない“終わり”だけを、織るの

明日も、来て――

大丈夫。あなたは、きっと来てくれるから

「七日目」―― 風が吹く日に

澄羽が、自分の願いと役目、そのどちらも抱いたまま最後の一步を踏み出す場面。

「生きたい」「飛んでみたい」という願いは最後まで消えることなく、その願いを知ったからこそ、自分の生きた証を主人公へと託していく。

主人公が自分を見つめ、信じ続けてくれたことは、澄羽にとって生きることを肯定してくれた何よりの救いだった。

別れの場面ではありますが、悲しみを強く表現するというよりも、静かな安堵と温かな想いを大切にしていただけだと思います。

一章を通して少しずつ芽生えてきた願いが、「飛べるって、信じてくれた」という言葉とともに結ばれ、風の中へと羽ばたいていくような温度感を意識していただければ幸いです。

ほら、やっぱり来てくれた

うん。だって、あなたはいつも見てくれたから

飛べるって、信じてくれた……

ううん。……ちゃんと、ここにいますから

一人じゃ、ないから――

やっと……見つけてくれたね――

— ありがとう

— また、風が吹く日に。